

《書評》

羽鳥卓也著

『リカードウ研究——価値と分配の理論——』

(1982年 未来社)

千賀重義

I

本書は、古典派経済学を対象として、精力的な経済学史研究を展開している、羽鳥卓也氏の新著である。羽鳥氏の、古典派経済学への最初の取り組みは、ロック、ルソー、重商主義といった市民革命期の思想に、経済学史的視点から接近するという、ユニークな研究成果として、『市民革命思想の展開——古典経済学成立史序説』（1959年刊）を生んだ。しかしこの書の後、羽鳥氏の関心は、スミス、リカードウ、マルサスの資本蓄積論の理論研究に向けられ、『古典派資本蓄積論の研究』（1963年刊、以後『蓄積論の研究』と略称する）、『古典派経済学の基本問題——蓄積論におけるスミス、マルサス、リカードウ』[○]（1972年刊、以後『基本問題』と略称する）、そして本書と、古典派経済学の理論研究三部作となって結実した。

このように、本書の性格は、基本的には『蓄積論の研究』によって設定されたものであった。その書の「序説 古典派資本蓄積論研究の方法」において、羽鳥氏は次のように論じていた。学史研究は、研究対象となる経済学体系にひとまず内在し、その論理に即して忠実に再構成するという「第一段階」と、その成果の上に立って、一定の理論的観点から批判的摂取を意図する「第二段階」とをもつべきである。したがって、古典派研究にあっても、まず最初は第一段階から始めるほかないのであるが、そうだとすると、古典派理論の特質は資本蓄積と所得分配が基軸にあるということなのだから、古典派研究は何よりも、蓄積と分配の理論にこそ焦点を合わせなければならない。このことは、古典派価値論の意

義を論ずる場合にも留意されなければならないのであって、まず検討さるべきことは、古典派価値論が、体系の基軸たる蓄積と分配の理論に対していかなる理論的關係にあるのかということ、古典派の理論に即して明らかにすることではなければならない、と。

研究方法に関するこうした立場から、重商主義批判との関連でスミスの資本蓄積論を、機械と失業、過渡的恐慌との関連でリカードとマルサスの資本蓄積論を、それぞれ内的に復元しようとしたのが、『蓄積論の研究』であった。これに対して『基本問題』は、スミス、マルサス、リカードの資本蓄積論を結ぶ、一筋の糸を探り出した。それは、蓄積の基本ファンドは利潤と地代なのか、あるいは利潤だけなのかという問題であって——時論的には、穀物法によって農業投資を保護すべきかどうかという政争点となって現出——スミス＝マルサスが、平均利潤率を前提すると農業投資は地代を生むだけ有利に見えるところから、地代を有力な蓄積ファンドだと考えたのに対して、リカードは、地代は「名目価値」の創造にすぎず、実質的富の増大ではないので、蓄積ファンドたりえないと論定していたことが、発見された。

著者によれば、本書は、『基本問題』の中の二つのリカード研究論文を全面的に改訂しようとしたものであるという。しかしこのことは、『基本問題』の中心テーマに改訂を加えたものと受けとめるべきではないであろう。『基本問題』での個々の論証点に改訂を加えているうちに、著者の検索の矛先が、分配論＝地代論から、次第に価値論の深みにまで及んでいき、次々と鉅脈を掘りあて、遂に、一書を編むほどの成果を上げたと言わなければならない。評者には、本書の意義は、地代を単なる名目価値だと論定したリカードの理論認識が、体系の基礎論たる価値論において再捕捉されたことにあるのではないかと考えられるのである。

II

本書は、リカードが分配理論に取り組み始めた1814年から、生涯を閉じた1823年までの、10年間にわたる理論探究の過程を、リカードの言動にぴったり密着して追跡している。著者が自説の証明にあたって、できる限り、推論に頼らず、史実をもってしようとしているからであろう、叙述の多くは諸事実や諸資料への言及を含み、したがって、各章はけっして短くない。そのために、本書を要約することは、始めから困難と問題を含むことになるが、しかし逆に、本書の性格は、要約という作業を経ない超越的な論評を拒否しているようにも見えるので、以下、紙幅の許す限り、各章の論旨を紹介することにしよう。

第一部は、「初期リカードの分配理論」が取り扱われる。著者は既に『蓄積論の研究』において、初期リカードの利潤率低下論が『経済学原理』のそれとは異なる独自性をも

っていると述べていたが、本書の第一部は、その持論が全面展開されることになった。そうした著者がまず注目するのは（第一章 初期の利潤率低下論）、1814年から『利潤論』までのリカードウが、蓄積の増進に伴う利潤率低下の論証を、農業部門と商工業部門とでは、別様の論理で行っていたということである。すなわち、農業部門では、劣等地耕作の進展による農業生産性の低下を根拠に、同一量の穀物を生産するのに必要な貨幣経費の増大が、穀物価格の上昇を上回ると断定することによって、農業利潤率の低下が論証されていた。これに対して、商工業部門では、劣等地耕作の結果としての穀物価格の上昇が、貨幣貸金率を上昇させるのに、製造品の価格の方は、より小さい比率で上昇するにすぎず（1814年8～12月頃、商工業部門に限って、投下労働価値説が採用されるようになり、したがって、貨幣貸金率の上昇にもかかわらず製造品価格は不変なので、と考えられ）、差額としての利潤は下落すると論じられていた。

ところが『利潤論』（1815年2月刊）になると（第二章 いわゆる「穀物モデル分配理論」について）、農業部門の利潤率低下論の論証の仕方に大きな変化が現われる。まず、差額地代論が導入されることで、一般利潤率を規制する農業利潤率は、耕境地でのそれであることが確立される。また、農業利潤率の算定にあたって、産出と投入の双方が小麦の量で表示された。1814年段階では価格タームで農業利潤率を算定していたリカードウが、なぜ小麦を価値尺度として採用するようになったのか、著者はこう設問して、それは論敵マルサスが、貨幣価値の一時的変動という論点をもちこんで、いたずらに議論を混乱させるのを防ぐためだった、と答えている。しかし、穀物を価値尺度だとすることは穀物価値を一定とすることであり、そうなると既に到達している投下労働価値説（ただし、商品価値決定に関する限りの）からすれば、製造品の相対価値は下落せざるをえないであろう。だが、製造品価値が下落するとき、製造品をもそのうちに含む農業の投入経費は下落するかもしれない、利潤率下落の論証はあやしくなる。この難点にリカードウは気づいていない。

『原理』への巨歩は、『利潤論』の直後に訪れた（第三章 『経済学原理』形成史のひとこま）。1815年4月17日の書簡において、リカードウは、価格ターム分析にもとづく農業利潤率低下論に復帰したが、地代分析を包含することで、劣等地耕作の進展に伴う穀物価格の上昇率を、耕境の所要貨幣貸金経費の増加にもとずいて算出するようになり（これ以前のリカードウは、穀価の上昇率を全耕地の平均穀物経費の増加にもとずいて算定していた）、こうして、穀物価格上昇→貨幣貸金率上昇→利潤率減少という論理の連鎖が、農業部門にも適用されるようになったのである。部門別の利潤率低下の論証は、ここに揚棄への道が開かれた。

しかし、この段階の理論水準にも、なお重大な制約があった。第一に、商品価値に関する

る投下労働価値説は確立していたけれども、「労働」にこの原理を適用していなかった。第二に、穀価上昇率は耕境に支出される貨幣賃金経費の増加率に等しいと考えられており、投下労働量の増加に比例するという理論水準に達していなかった。後者の点は、1814年10月には是正されていることが確認されるが、その経緯は明らかでない。前者の点は、15年4月以降の、実質賃金一定を前提することの是非をめぐるマルサスとの論争の中で、リカードウが次第に、資本主義経済には実質賃金を可能な限り低く引き下げようとする機構が作動しているから、長期的には実質賃金一定を想定するのは妥当であるという見解を固めるようになり、この見解の基礎のうえに、「労働」にも、投下労働価値説を適用するようになった。15年10月には、「労働の価値」という表現がとられるようになることが、それを確認するであろう。

第二部は、『経済学原理』の価値と分配の理論が、初版から第三版にかけての価値論の改訂問題を取り扱いかいながら考察される。まず最初に(第四章 価値論と「社会の初期段階」)、(1)スミスが投下労働による価値規定の適用を「社会の初期未開の状態」に限定したことを批判する文句が第三版で省かれたこと、(2)第三版において、交換価値は商品に投下された労働量に「もっぱら依存する」との初版の文句が「ほとんどもっぱら依存する」という文句に置き換ったこと、の二点の改訂理由が検討される。著者は、これらの変更理由を、あるべき価値尺度の条件をリカードウが変更したことに求めたスラッフアの所説を文献処理上の難点を衝くことで批判し、ミックやムーアの研究業績を批判的に継承しながら、この変更理由を、「社会の初期段階」に関するリカードウの想定の変更求めた。すなわち初版では「社会の初期段階」が、蓄積以降の社会だが(この点、無階級社会としてのスミスの社会の初期未開の状態とは異なると著者は見る)、異種産業間で固定・流動資本比率の差異などない想定していたのに、第三版では、そのような差異があると考えを変更したために、社会の初期段階でも価値修正が生じるという変更が行われたのであった。

つづいて(第五章 価値論と階級間分配率命題)、『原理』初版価値章の最終段階では、分配問題の究明は「一國の土地および労働の全生産物の、地主・資本家・労働者の三階級の間での分割」によるべきだとなっていた箇所が、第三版では「ある特定農場の全土地生産物の……」と書き改められた理由が追求される。著者はまず、リカードウ価値論の核心が、商品の価値及び労働の価値がともに投下労働量によって規定されるとすることで賃金や利潤の騰落は両階級間の分配比率によって判定すべきだと結論したことにより、問題の文句は、この結論を端的に表示したものだとする。しかし、この文句は地代を含むところから問題を複雑化した。とくに、劣等地耕作の進展とともに、既耕の優良地での生産物の

なかの地代の割合は必ず増加するけれども、耕境の生産物の中には地代がないのだから、一国の土地生産物総量のなかで地代の占める割合は必ずしも増大しないという問題こそ、文句変更の理由となった。

最後に(第六章 分配理論と「不変の価値尺度」)、問題になる文章は、1820年6月13日付の書簡にある、「地代・賃金および利潤についての大問題は、全生産物が地主・資本家および労働者の間に分割される割合によって説明されなければならないのであり、それは本質的には価値の学説とは関係がないのです。」というものである。リカードウ研究者を悩ましてきたこの難文を解説するため、著者は、この書簡を1819～20年の資料の文脈の中に置き、この頃のリカードウのメンタル・ヒストリーを追う。そこで検出されたことは、リカードウが二つの問題でマルサスの厳しい批判にさらされていたことである。そのうち一つは、貨幣の生産条件に関するものであって、この点は、初版では素手の労働の産物だとされていたものが、第三版では、全商品の中位の資本構成をもつ資本と労働の産物へと変更されるという帰結を生むが、このことは、賃金・利潤の相反関係論への確信を揺るがすものではなかった。ところがいまひとつ、資本の回収時間は、投下労働量とは別に、商品の価値決定に加わるのではないかというマルサスの主張は、商品の絶対価値の尺度の条件如何という難問をリカードウに課すことになり、1820年6月段階では、その答が用意できない状況にあったことから、さきの文章表現が現われたというのである。

第三部は、「晩年の『絶対価値の尺度』の探索」の歩みが追跡される。まず(第七章 価値と自然価格との乖離について)、絶対価値の尺度の追求という課題をリカードウに負わせることになる、価値と自然価格との乖離の認識がいつ頃生じたかという問題、および、その認識は『原理』第三版の改訂に何らかの影響を与えたかどうかという問題が考察課題となる。第一の問題について、著者は、リカードウが価値と自然価格との乖離という問題に事実上遭遇したのは1818年2月頃のトレンズとの「対話」の中であったが、それを問題として受けとめたのは、前章で見た、『原理』第二版出版後のマルサスの批判によってであった、とする。しかしながら、『原理』三版が、この価値と自然価格との乖離の認識を基軸にして改訂されたかという点ではなかった。むしろ、考察の主題は、賃金騰貴が各種の商品価格をどのように修正するかという点にあった。これは、改訂を分配問題の解明に必要な限りにしたいとの意向のせいでもあったが、絶対価値測定のために妥当な価値尺度の条件がまだ選定できないせいでもあった。つづいて(第八章 晩年の価値尺度論争への参加)、遺稿「絶対価値と交換価値」分析の準備作業として、1823年のマルサスおよびマカロックとの論争が検討される。マルサスとの論争では、支配労働を妥当な価値尺度だと

主張するマルサスに対して、中位の資本比率のもとで生産された貨幣商品を推すリカードウが考察されている。マカロックとの論争では、資本の回収に要した時間も、たとえばぶどう酒の醸成は自然が労働したと考えてよいように、投下労働量に還元できるのではないかと主張するマカロックに対して、多年の回収時間の間に複利で蓄積された利潤を、労働の名で呼ぶことに疑義を表明するリカードウが考察されている。

本書最終章では（第九章 未完の遺稿『絶対価値と交換価値』について）、絶対価値の尺度を追求するリカードウの最後の苦闘が分析される。二種の草稿からなる遺稿は、二つの論点から成ると著者は見る。すなわち、賃金ひいては利潤率の騰落が、回収時間を異にする諸商品の相対価値を変動せしめるという問題との関連で、妥当な価値尺度は一年間使用された労働と資本の所産であるべきだとされるのが一つ。いまひとつは、資本の回収時間が異なることそれ自体が、投下労働量と並んで、諸商品価値の差異の原因になっているという問題を前面に据え、投下労働価値説を妥当ならしめる価値尺度の条件を問うものであった。リカードウは、後者の場合もやはり、資本の回収に一年を要する商品を尺度として選ぶことを提案する。なぜなら、もし価値尺度が一年で生産されるものであれば、測定されるべき商品は一年に一度ずつ評価することになり、たとえば、ぶどう酒や樹木のように長年にわたる資本の回収時間を要する商品も、一年ごとに、もしその資本が寝かされることなく労働雇用に使われていたら投下されたであろう労働量に還元することによって、投下労働量でその価値を評価することができるであろうから、というのである。著者はこれを要約して言う「かれは事実上において価値と自然価格との乖離を認めていた。だが、これを認めたことは、かれの基礎的立脚点たる労働価値論の定式化のなかに重大な欠陥があったことをかれ自身が認めたことになる。その結果、かれはこの欠陥を補強する必要を痛感した。しかし、かれの補強作業は、かれが価値と自然価格との範疇的区別に最後まで気づくことなしに行われたものであったから、この作業は『不変の価値尺度』の探索という形でしか行われえなかったのである。だから、この探索によって、かれはすべての商品価値を労働量に還元することに成功したけれども、それは虚構の労働量への還元ということを達成するものでしかなかったのである。」（本書、417ページ。傍点は羽鳥氏。）

III

本書を読んで、感動したこと、問題に感じたことを述べてみたい。

まず問題点の方から挙げると、その第一は、本書による初期リカードウの理論形成過程は、始め、商工業部門において、利潤率低下論としても、商品価値論としても、『原理』に近い認識が生じ、それが農業部門に拡大適用され——とくに、地代論の助けをかりて、穀

物価値が投下労働量によって規定されるようになり——、『原理』の理論水準に近づいていくことになる。この見方は、リカードウ理論形成にとっての地代論の意義を明確にする上で長所をもっている。がしかし、他方で、初期リカードウ分配論の本体をなす農業利潤率低下論の意義が、『利潤論』以前の（地代論をもたない）それに関する限り、消極的な評価しか与えられないという短所をもつことになっていないだろうか。⁽¹⁾

問題の第二は、リカードウのいう「社会の初期段階」は、資財が蓄積されて以降の社会すなわち資本主義社会のことであり、スミスのいう「社会の初期未開の状態」のような、無階級社会とは異なる、という論点である。リカードウが、資財の存在が投下労働価値説を無効ならしめるものではないことを論ずるために、初期の社会にも資財があったことを強調しているのは事実である。しかし、資財があることと、社会が階級に分割されていることは一応別である。評者には、リカードウは、資財があるがなお階級に分割されていない社会をも、初期段階の想定の中に入れてるように思われる。第一、もし初期社会が、資本主義社会と同一ならば、あえて初期社会を云々する必要がなくなってしまう。もっとも、著者は、リカードウが初期社会に関する想定を、資本構成に関して資本主義と同一のものだと変更することで、リカードウ理論は完成に向かったと考えているようにも見える。だが評者は、リカードウが、投下労働価値説の展開にあたって、資本主義とは異なるものとしての初期社会を問題にしていると捉えることに、ある意味があるのではないかと考えている。⁽²⁾

第三の問題は、リカードウにおける不変の価値尺度への執着が、ただ、価値修正論の観点からのみ、つまり、諸商品が異った生産条件＝資本構成のもとで生産されるところから投下労働価値説の単純な適用ができないという問題の観点からのみ、考察されているように見えることである。しかし、地金論争期における不変の価値尺度への言及はさておいても、リカードウが、貴金属の不変性の想定は、自らの体系の最後の基礎だ、と記述するのは、彼が、価値修正問題に気がつく以前のことであったことが忘れられてはならないだろう。評者は、リカードウの不変の価値尺度論の分析にあたっては、価値と自然価格の乖離という問題視角ばかりでなく、価値と価格形態との乖離という問題視角をも合わせもつべきだと思っている。

さて、評者が、本書を読んで最も感銘を受けた論点は、前項末尾で紹介したところの、晩年のリカードウが自らの労働価値説を、「虚構の労働量」でもって、補完・擁護していたという、著者の発見である。この論点は、評者には、『基本問題』での、地代は名目的価値にすぎないとリカードウが考えていたという著者の発見と、同じ文脈にあると思える。二冊の著書の結論を合わせると、地代・利潤・賃金はともに投下労働価値の分割部分だと

リカードウが言うとき、そのうち地代と利潤のある部分（いまだ、利潤のすべてではなく、資本の回収時間にもなって付加される部分だけに限定して考えるべきであろう）は、具体的労働の生みだした価値ではないと言っていることになる。これは、地代・利潤という剰余価値の源泉は、リカードウの到達した理論ではどう考えられるのか、あるいは、商品価値を規制するものとしての投下労働量とは、いったい如何なる性格をもつものなのか、といった根底的な問題を提起しないではおかない。それはまた、こうしたリカードウの理論認識は、いったい古典派労働価値説の崩壊なのか、それとも偉大な到達点なのかといった判断を研究者に迫るであろう。——羽鳥氏は、おそらく古典派研究の「第一段階」に自らを禁欲してであろう、こうした判断に関わる点については、多くを述べようとはしない。この点、読んでいて、少々もどかしきもあるが、著者の「第二段階」の仕事が、待ち遠しくもなるところである。

- (1) 本書の初期リカードウ解釈への鋭い批判として、中村廣治「リカードウ初期利潤論の完成と価値論の生成」（『広島大学経済学部紀要』、年報経済学、第3巻）を挙げておきたい。
- (2) この論点は、岡本利光「労働価値論史上におけるリカードウ価値論の位置」（平林千牧編『時永淑先生還暦記念、経済学史研究』所収）から示唆をえた。